

## 描かれた図から見た深海魚ミズウオ

久保田 正

ミズウオ (*Alepisaurus ferox*) は、ミズウオ科ミズウオ属の2種のうちの1種です。世界中の深海に生息し、外洋性で成長すると2 m以上に達する大型の深海魚です。また、本種は、かなり古い時代から知られていた深海魚ですが、単独行動で纏まって獲れることはなく、しかも食用にならないこともあり、魚類学者を除いてはほとんど注目されることはありませんでした。

特に、本種の背鰭や臀鰭の軟条数および背鰭や尾鰭などの形状に変異幅が大きいこともあって、世界中の魚類学者が次々と新種を発表したことにより、分類学的な混乱を生じていました。その様な状況の中、米国の国立自然博物館の魚類学者のR.H.Gibbs 博士が本科魚類の整理を行ない、僅か2種類であると1960年に発表して現在に至っています。

本種は、前述のように鰭の形質の変異幅が大きい背鰭に特徴がみられ、このような魚種の例はあまりないので、いくつかの文献に見られる背鰭の形状に注目して紹介します。

本種を最初に描いた記録としては、1703~04年に中部大西洋域で行われた探検航海で得た個体をイギリスの探検家でナチュラリスト

であるW. Funnellの手により描かれて1707年に発表したものです。それは、“クラゲ魚”としてかなりデフォルメされて描かれています(図1)。

一方、日本国内では、江戸時代の後期に栗本丹洲(本草学者、医師)の著書である「栗氏魚譜」(1817)にみられるのが最初です(図2)。

その後、世界中の魚類の研究を行なったGoode and Bean (1895) は図3のように描いています。そして、1960年に前述のようにGibbs博士がミズウオ科魚類内の分類学的な混乱を整理し、本種の背鰭の始部は、鰓蓋骨後端の直上が、それよりも僅かに後方から始まっていることを、もう1種の種と区分し、2種類としました(図4)。

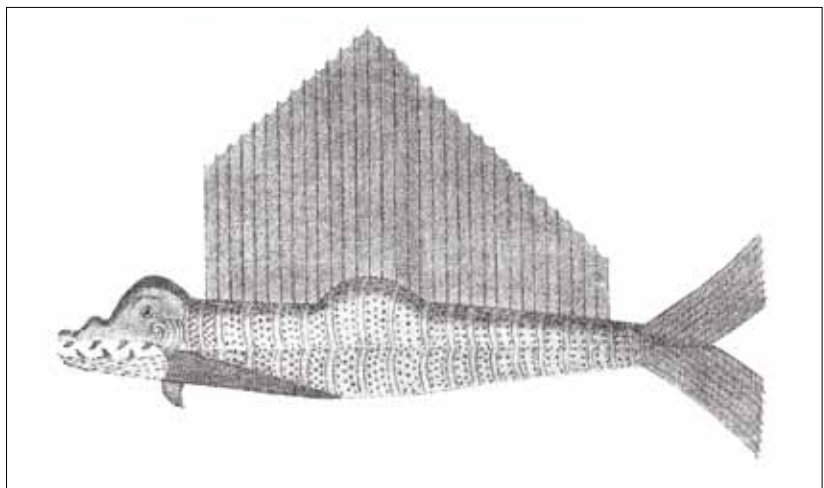


図1 1707年にイギリスのW. Funnellが最初に描いたミズウオ (Gibbs & Wilimovsky, 1966より引用)

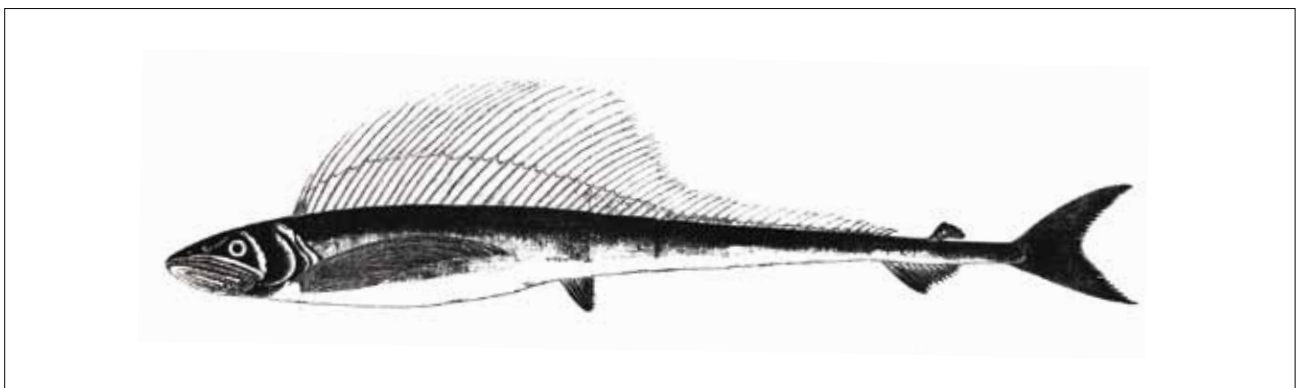


図2 江戸時代後期に栗本丹洲が描いたミズウオ (栗本、1819より引用、改変)

また、日本国内では、1949年に発行の蒲原著の「深海の魚族」にGoode and Beanの図が散見出来ます。そして1963年および1987年に発行の原色魚類図鑑では、Goode and Bean (1895) の図を基にカラー化していますが、2点の図鑑共に背鰭は2種の特徴が、混在して誤って描かれています。これは、訂正されることなく現在に至っています(図5)。また、1965年に出版の「新日本動物図鑑(下)」および1993年に出版の「日本産魚類検索—全種の同定」でもGoode and Beanの図が基となって描かれています。特に前者の図鑑では

本種の学名の種小名は *borealis* となっています。さらに上述の1963年に発行の図鑑でも同じ扱いです。このように本種を太平洋産と大西洋産を別種として扱い太平洋産の個体を *Alepisaurus borealis* とすると本科の魚類数は3種となりますが、現在は *Alepisaurus ferox* として扱われています。

以上のように本種は、昔からその存在が知られている大型の深海魚類でありながら、特に目立つ背鰭の軟条数や形状の変異幅が大きいためにより、魚類学者を惑わしてきた不思議な深海魚です。

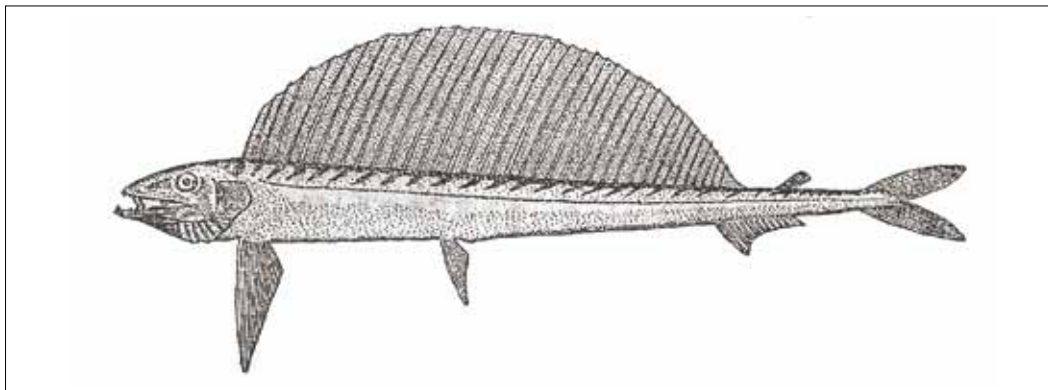


図 3 1895年に発行の論文に描かれているミズウオ (Goode & Bean, 1895より引用)

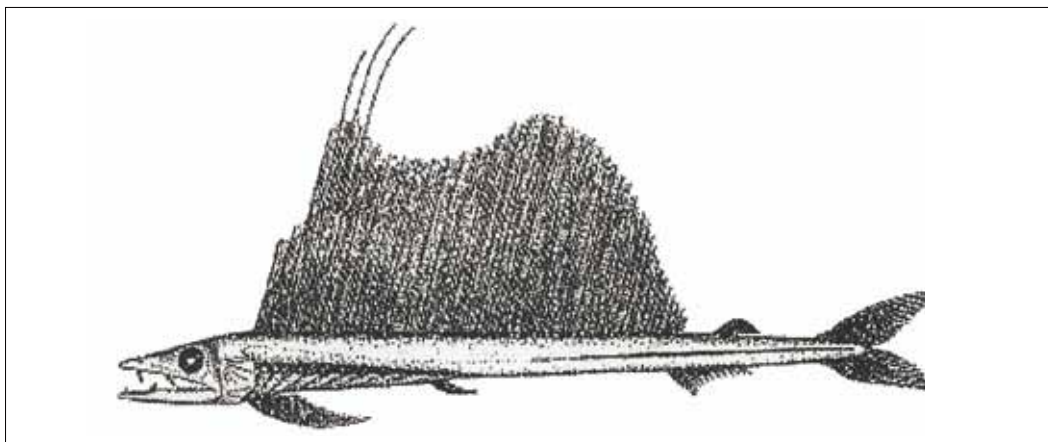


図 4 1960年に新種として発表時の論文に描かれているミズウオ (Gibbs, 1960より引用)

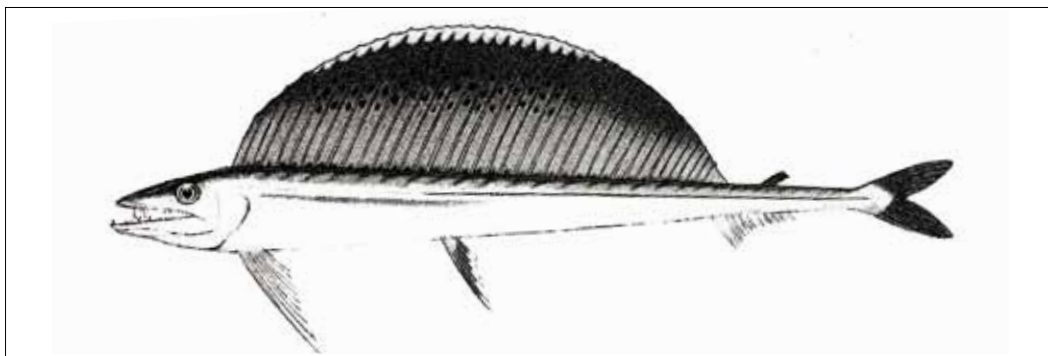


図 5 背鰭に斑紋が描かれているミズウオ。これはもう1種のツマリミズウオの特徴です。(原図は、カラー印刷) (阿部、1963より引用、一部変更)